# フランスのテレビ文化について
## ―グローバリゼーションの中の文学―

立 川 信 子

2004年にデリダが，2005年にはリクールがこの世を去った。この二人はアメリカで晩年の活動をしている。フーコーやブルデューというフランス文化を代表していた巨人が次々とこの世を去っていった。フランスの地域的な勢力の衰退という現象と同時進行している実学志向も，アメリカ文化を標準として世界の様々な分野で同じことが起こるグローバリゼーションの一つと言えるだろう。これは20世紀の初頭にヌベル・ソルボンヌの問題としてすでに科学主義と人文主義の葛藤という形で表れていた。フランスでも文学離れともいうべき現象は指摘されてきたが，年代にフランスの中学校は文学解釈から言説分析に国語教育の中心を移した。しかし，文学が担ってきた分野は本当に不要になりつつあるのだろうか。ブルデューはドキュメンタリー映画に，彼自身に対して社会学が御用学になっていることを批判される場面で，世界共通の現象である学問の実学重視の中で一見客観的にみえる実学の主観性と危険を伝えている[1]。

この世界化はかってのフランス文化の特色とされたものを変えてきている。特にパリを変えつつあるようである。飛行機代が安くなったため，また情報が行き渡るようになり，観光客が一年中あふれかえるようになったパリはテーマパーク化したようにみえる。歴史的なものをそのまま残そうという努力と新しい観光資源を開発しようという努力によって美しいままに残っているものの，都市が生きている自然な生活の活力が奇妙になくなっているようといえばよいのだろうか。生活する人々が生活費の高くて，都市公害で環境の悪化した都心を離れて郊外に移動しているせいだろうか。

食生活からいうならフランス風の惣菜屋は減り，中華の惣菜屋が増えた。寿司の惣菜屋も増えた。フランス料理の本の中に日本料理をはじめフランス以外

の料理がふえた。値段からいっても作る手間からいっても中華がフランス料理を手軽な日常料理のレベルでは浸食しているといえる。フランス的エレガンスというのは大人の趣味だという日本の雑誌の固定観念も当てはまらなくなってきている。動物のマスコットを鞄につけるのは子供の趣味だったが，今は学生街の文具屋にマスコットが並んでいる。芸術的なポスターしか扱わなかった店にもアニメ風のデザインのカードが並んでいる。カトリーヌ・ドヌーブのような頑丈な大人の女性は年代的になり，イザベル・アジャーニのような怪しげな魅力をもつ女性も幾分遠くなり，アメリーを演じた女優のような純真で子供っぽい女優が古きよきフランスを彷彿とさせる『長い婚約の日曜日』のような映画でロングランのヒットをとばすようになった。単色で単純ラインのシャネル風のフランス趣味ではなく，モードは日本でもフランスでも同時発信になっている。今年はどこでもアンバランスなカーブか乙女チックなフリルのスカートにタンクトックにサンダルで，というわけである。そのサンダルはバングラデシュで作られて，スペインで商品化されていたり，フランスのブランドだったりする。世界的な熱帯化でフランスも熱波にみまわれるようになったから，今までの素材やスリムなスタイルにこだわっていられないという実際的な事情もある。ただフランスは日本よりまだ他民族社会のためか，各人がいろいろな格好をしているところはまだ日本とは異なっている。

健康志向も日本と同じで，暗い酒場で酒を飲んだり，踊ったりするデカダンスの詩人のイメージは観光客向きになり，ジョギングをはじめとしてスポーツが日常に普及している。自転車やスケートボードの普及は健康志向だけではなく，ストで交通が混乱することが多いことが大きな原因だろう。パリの石畳の上を車の波を縫って走るというような風景は10年前には見られなかったが，今は歩道の柵に自転車がつながれている風景はあちこちにある。頑丈な鍵で結びつけられているのが日本と違っているが。日曜大工が好きなのは昔からだが，それにさらに園芸趣味も大幅に広がったようで，香料を売っていた店も鉢植えの方がふえて日本の園芸店と変わらなくなった。

フランス人が好んで英語を話すようになり，英語が大学や観光地では通じるようにもなった。EU憲法がフランスの拒否によって今一時頓挫したとはいえヨーロッパ共同体の形成と一体化はあらゆる分野で進んでいる。大学も国際競

争の中に組み込まれて，国際交流が活発になり，教師も学生もたえず世界中を動くようになりつつある現状では英語はできなくてはすませられなくなっているからだろう。『スペイン宿』という映画はエラスムスという名前の交流制度によってバルセロナの大学に留学した学生がいろいろな国籍の学生と家を借りて住む話で，地方語の問題にきづいたり，恋人との関係などに悩みながら視野の広い独立した大人になる青春物語である。フランス人，特に一般的によいとされる軌道に乗った人生をおくってきたパリの若者なりの文化ショックが描かれていて，どこの国でもフランス語とフランス風の生活スタイルで闊歩したピエール・ロチの時代のフランスの中華思想が後退したことを感じさせられる。

コミュニケーションについていえば，インターネットの普及が大きく世界を変えていることはいずこも同じである。ミニテルからはじまってネットは早くから普及してはいたが，今やインターネットはフランスのさまざま分野に浸透し，なくてはならなくなりつつある。もともと分業がはっきりしていて，情報の伝わりにくいフランスではインターネットは便利な媒介手段を提供したのである。

マスメディアという面ではフランスのテレビ番組は日常的な文化を代表しているといえるだろう。映画も芝居もパリではまだ健在ではあるが，テレビは日常的には一般の人の一番大きな文化的な娯楽であることに違いはない。テレビや新聞雑誌に関する研究は社会学ではすでに盛んになされている。ブルデューの指摘を待つまでもなく[2]，マスメディアによる文化が経済的な条件に強く支配されていると同時に学問の世界をはじめとして多くの分野に大きな影響を与えていることは明らかである。さらにテレビの文化が常識的な世界観に迎合的であろうということも予想される。テレビは映画やコンサートといった文化的手段と異なって個人のもとに送られ受容されることを必要とするからである。『美術館と老婦人』でパリの郊外やル・アーブルで美術館へ行かない労働者を取材して，美術館へ行くという行為が家族の教育によるということが論じられている[3]。家庭教育が学校教育とともに社会格差を作り出す役割を果たしているということを論じた一つである。

ブルデューのこの格差が継承されるという考察は確かに説得的である。人間

は地域の文化の中で育ち，そこで活動することによって十全に力を発揮できると主張したバレスとの『根なし論争』論争で，ジッドが人間は生まれた場所を移動することによって成長すると反論し続けた[4]。

社会や家族の道徳からの解放を主張したジッドの個人主義からは，人間がその生い立ちの場所から離れれば成長できないとは考えられないのである。ブルデューの理論は生い立ちの役割を検証するということではその考えを否定しているといえるだろう。生い立ちは離れられるものではなく個人の中に書き込まれているといっているのであるから。しかし，ジッド的な表現でいえば，家族から物理的であれ精神的であれ離れ，別の土壌をえたならば，その種はもとの土壌とは異なった実をつけるともいえるだろう。ただジッドが考えているよりはるかに人間は社会的条件によって規定されている。それがどういうものかを知るのは無意識と化しているために容易ではないでない。テレビは個々の家庭ではなく，文化的共同体のいわば常識によって作られ，またそれを作り出している。階層性や民族的な差異が比較的顕著ではない日本の社会では中間層意識が全体に強かったが，今それが変化して社会的競争よって勝ち組負け組というような新たな階層意識を作られ始めていることはすでに論じられている。『フランスの苦悩』でオイル・ショック以後フランスでは特に貧しくも豊かでもないが社会からはじきだされているというなんとはなしの疎外感を持つフランス人がいることを指摘している[5]。具体的に物理的な貧富によらないこういう階層意識はある意味ではマスメディアの力が強くコミュニケーションによって人との比較が容易になった社会に特有の意識だといえるだろう。

マルチメディアで送られる文化は資本の援助なくしては作られ得ない。それを変えつつあるのがネット文化ということになるだろうが，ネットはまだ現在ではテレビほどの影響力を持ってはいない。資本に依存し視聴者を必要とするマルチメディアはどんなにスキャンダラスにみえようとも，そのスキャンダル自身が常識で解釈されて許容範囲に入らなければテレビで見られることはないと予想することができる。フランスのテレビ文化を考察すればフランス人の常識を伺い知ることができるだろう。それを日本のテレビと比べて見れば両国の常識の違いを考えるのに役に立つだろう。たぶん日本人がフランスという名で思い浮かべるイメージと現実の違いがわかるかもしれないし，私たちの常識が

どこまで常識かを考える手掛かりになるだろう。本論では目立った点を簡単に考察してみよう。

日本との共通点からいえば，宝探しゲーム[6]のようなバラエティー番組，討論番組は内容の違いはあるとしても形式的には共通といえる。ただ同じゲームでも，トップモデルを競うことでモデルの世界というようなパリならではのテーマが工夫されている[7]。日本との違いの目立つ点についていえば，まず映画が多い。映画ではアメリカのアクション映画が少なくなく，次にフランスの心理的な葛藤を描いた映画が多い。テレビドラマはその本数は少ないが，何回かで完結しているドラマや長期連続になっているテレビドラマはある。推理ドラマが多いのが目につく。警察の犯罪調査はアメリカのドラマも放映されている。現代社会の孤独とか商業主義のストレスが生み出す精神異常者の犯罪のように異常でショッキングな事件をとりあげているのが目につく[8]。日本のホームドラマに相当しそうなものとしてたとえばアパートの住人を描いたドラマはフランスの日常生活をコミカルに描いている[9]。アパートの管理組合長の家族，キャリアウーマンと内職男，同性愛の男性カップル，同性愛ではない共同生活の二人の女性，年配の姉妹で構成されているアパートが共同体をなしていて，日本の落語の長屋の話のようにほのぼのとしたもめ事を毎日曜日の夕方にくりひろげているのをみると，フランスの勝手にしゃがれ風の個人主義というのは伝説なのかと思える。伝統的な家族の概念ではない家族が多いが，他人の生活に対する罪のない好奇心は世界共通で，この話は幾分エデンの園風に美化さてはいるが，人が狭い空間の中で何世代にもわたって暮らしてきたパリの集団にはそれなりに人間関係があることが推測される。

ドラマや映画の内容として一般的に時事的な話題をドラマ化したものが多いといえるだろう。アパートの管理人が天使で，家政婦の不法雇用や子供の教育というような社会的な問題を解決していくドラマもある[10]。同性愛者の恋愛とそれの社会との葛藤を同性愛者に共感を寄せて描いたものもある[11]。老人の恋愛を美しく描いたドラマも少なくない。恋愛の多様化といえるだろう。同性愛者の社会的認知は時事的な問題でもある。カトリックがフランスよりも強いスペインでも同性愛者の結婚と養子縁組が認められるようになり，その反対運動が起きている。国際的な売春組織はルポルタージュ映画も作られたが，テレ

ビの連続ドラマにもなり，危険を警告している[12]。日本の今風ドラマのように30代の女性を中心とした結婚と恋愛というような問題を扱ったドラマはないわけではないが，アメリカで制作されてニューヨークを舞台にした話が金曜の深夜に数話連続して放映されている。多夫多妻，独身主義のように日本ではみかけないテーマが多い[13]。離婚が多く，結婚への社会的圧力が青年層にそれほど強くない社会ではドラマ化するほどおもしろい題材ではないのでむしろ特異なケースの方に題材を求めるせいだろう。スリルがテレビドラマになくてはならないのはテレビという時間的な媒介の場合当然であるが，日本のオカルトに相当するものとしては，魔術とか悪魔とかキリスト教の背景があるようなドラマであるが，キリスト教的な背景が強く出てきている。魔女狩りに見られる特殊な人と一般の人との対立の意識と特殊な存在への共感というパターンを認めることができるだろう。

日本とはドキュメンタリーで取り上げられる地域とテーマは異なっている。当然のことながらフランスでは旧植民地の地域を中心とした地域，及びヨーロッパに近い地域のドキュメンタリーが多い。ナチスドイツの戦争犯罪，フランスの植民地での弾圧，トルコでの女性の虐待やサルジニアでの私的復讐というような人権問題を取り扱った番組が少なくない。20世紀初頭に起ったトルコによるアルメニア人の強制移住と虐殺の事件は2004年が記念の年にあたったこともあってしばしば報道された。日本では教科書で南京事件を隠蔽しているという中国のデモがあったときには南京虐殺の映像が流されていた。フランスは世界大戦の戦勝国であるから，こういう報道がしやすいという点を引いても，度重なる戦争の悲惨さや人権問題も重視する報道ははるかに多いといえるだろう。8月には60周年のために第二次世界大戦の日本に関する映画や原爆のドキュメンタリーも幾つも放映された。イラク戦争をはじめとしてアメリカの外交政策にフランスが批判的なことやモーリス・パポンのナチスへの協力による人類に対する犯罪の裁判にみられるように戦争犯罪は今なお現在時の問題であるからだろう。テレビ映画でもレジスタンスをテーマにしたものやこの時代を描いたものは少なくない[14]。

日本の事件をコメントするという週刊誌風の番組もあるが，はるかに少ない。学校長殺人事件についてのテレビのドキュメンタリー (2005年5月1日) のよ

うに謎を解明するという推理小説風の番組か，事件の当事者が出演して自分の立場を説明するという形を取っている。イスラム教徒の女性が強制された結婚から逃げ出し，女性の地位に関する批判をした本を出版し，追われているのでガードマンと一緒に出演したり，アパートの立ち退きを迫られていて訴訟をしている本人がでてきたりする。フランスへは当事者に対する好奇の目が日本ほど悪意になることが少ないからではないだろうか。イラクで人質になって解放されて帰ってきた記者をシラクが空港に出迎えたシーンやインタビューは大喜びでの出迎えの活気を感じさせる。人質になった人の職業と救助の過程が異なるとはいえ，日本での出来事で表れてきた意識との違いは，イラクに参戦しているかどうかの政治的な国の立場だけからは説明出来ないほどに大きいと思われる。日本にはまだ魔女狩りの意識が残っているとはいえないとしても，一般の軌道にはずれたとみなされるかもしれない人に対する共感というのは表にはでてきにくい。

ドキュメンタリー番組は政治的というよりは社会的に時事な問題を解説している。日本の津波の科学的分析までいれたようなNHK特集のような特集はあまりなく，日本の報道番組とバラエティー番組の間のような番組が一般の興味を引きそうな題材を取り上げている。フランスの農業についてのテレビのドキュメンタリー (2005年5月2日)，農業従事者の孤独と阻害。1960年代から独自の経営ができなくなった。収益が上がらなくなった。多くの移民のいる他民族の資本主義社会の競争は生易しくはない。浮浪者が道で寝転んでいるのは失業率の高くなったこの数十年もうありふれた風景になってしまったが，あきらかに拝金主義にもとづいた番組もある。『資本』という日曜9時代のゴールデンタイムに放映される番組では主に経済的な成功物語を分析する取材をしている[15)]。モナコの王，ヒルトン姉妹，マドンナ，ジダン，イケヤ，ナイキ，マッキントッシュなどの個人的な例を取り上げている。いずれもスポーツ選手の特異な能力，投機など経済的な能力，車のピザ屋や廉価なプチフールの生産といった発想力もあり，スキャンダルという形を取る場合もあるがいずれにしてもマスメディアによって作られたイメージがいかにマーケッティングに利して巨額の金をもたらしたかという点が強調されていることが多い。

テレビのドラマと映画と，プレイアード版に収録されているような文学の間

に文化的な差異は，文学そのもの中だけではなく，テレビと書物の間にやはり存在するように思える。後者に属する小説をテレビドラマ化しているものは勿論ある。『オーレリアン』(ルイ・アラゴン作) が例である。『ジェルミナール』のような文学作品を映画化したものも放映される。しかし，その数は多くはない。映画は映画としての映像の迫力を持っていることはいうまでもないが，小説の筋の複雑さや作中人物の心理分析を映像化することは容易ではないし，一般には娯楽番組には負担が大きすぎるからだろう。それにテーマの違いも大きな要素としてあるように思える。人生と世界に対する失意はしばしば文学のテーマである。生きることと芸術が相反するということがプルーストの考えの根底にある。それに対してジッドは，芸術は生きることの過剰から生まれると言っている[16]。十分に生きてこそ書くことができるということだ。『地の糧』をはじめとして生きる喜びをテーマとすることで知られた作家であるが，生きたことに関する複雑な思いが文学を生み出したことに違いはない[17]。それに対してテレビのフィクションはアクションの面白さ，スリル，映像の美しさが主体で，現状肯定的な結論で終わるものが多い。ただフランスのテレビ映画は日本で放映されないような肯定の仕方をしていて，一般的な意味では結末にみえないものが少なくない。たとえば殺人犯が恋人なのではないかという疑惑はそのまま残るというようなものである。その意味ではフランスの方が一般に社会的道徳に反するものに対する許容範囲が広いということがいえるだろう。

グローバリゼーションの中で確かにフランス的といわれたものはなくなりつつある。ただテレビという手段は同じで，娯楽番組で報道番組という形は同じでも，その内容はしばしば異なっている。インターネット，ロックンロール，ファーストフードというような現状面の共通性だけでは文化の根深い差異はみえてこない。また，先進国の画一化がすすんでいるとしても，先進国は世界の一部にすぎない。テレビ番組の研究は伝統的な文学研究からははずれるように思われる。しかし，読者の研究が社会文化的な研究の対象になるだけではなく，文学的な研究の対象となるように，ネットなどの手段がもっと発展すればテレビ文化の研究も可能になり，作品の分析によって現在の大衆文化を形作っているテレビに反映されている視聴者の意識を明らかにすることができるようにな

るだろう。ブルデューは社会学者が社会の無意識の構造を明らかにするから嫌われるものだと言っているが，文学の分析はさらに個人的なレベルにおいて個人の構造を明らかにすることができることは世界の変化の中でも変わりはないだろう。

## 注

1) *La sociologie est un sport de combat*, Pierre Carles réal., Édition Montparnasse, 2001.

2) *Sur la télévision*, Gilldes L'Hôte, réal., filme de l'Arlequin, 2000 ; *Le champs journalistique et la télévision*, Gilles L'Hôle, réal. 2000.

3) *La vieille dame et la sociologie : le musée*, Paul Séban, réal., Bry-sur-Mame, Institut national de l'audiovisuel, 1973.

4) Gide André, *Essais critiques*, édition présentée, établie et annotée par Pierre Masson, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, pp.121-126.

5) *Souffrances d'en France*, Simon Freige, réal. Bry-sur-Mame, 1993.

6) *Fort Boyard*, France 2 土曜日 20:50-22:40 ; *La carte aux tésors*, France 3 火曜日 20:55-23:05.

7) *Top modèle 2005*, M6. 審査員の討論のシーンは個人的な価値観がでていて興味深いが，最終的にはウエーブの長髪の表情豊かな白人というステレオタイプに票が集まる傾向は相変わらずのようである。

8) *Les Experts*, TF1 月曜日 22:45-1:10; *FBI*, France 2, 月曜日，水曜日 20:55-22:25.

9) *Faites comme chez vous*, série, M6 日曜日 18 :40-19 :50

10) *Joséphine, ange gardien*, TF1, 月曜日 20 :55-22 :40

11) Clara Scheller, F2, 水曜日 20:55-22:25 など。.

12) Matrioshki: *le trafic de la honte*, série belge en dix épisodes, M6,22:30-23:25.

13) *Sex and the city*, série américaine,M6, 金曜日 23:25-0:25.

14) *La bicyclette bleue*, France 2, 8 月 27 日 ( 土曜日 ) 14:40-18:00, 8 月 28 日 ( 日曜日 ) 13:25-15:10

15) *Capital*, M6 日曜日 20:50-22:45.

[16] Gide André, *Essais critiques*, édition présentée, établie et annotée par Pierre Masson, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, p.56.

[17] マッソンもジッドについて次のように言っている。«C'est en mars 1917 qu'il découvrait cette "profession de foi si importante", alors que, en pleine rédaction de *Si le grain ne meurt*, désireux de s'arracher à l'angoisse de l'échec et de la mort, il se faisait critique de lui-même.» (*Ibid.*, p.LXXVI)

# Les programmes de télévision en France et au Japon

Nobuko TATEKAWA

La présente étude a pour but de saisir certains aspects des différences culturelles de la vie quotidienne en France et au Japon, en prenant notamment pour objet les programmes télévisés.

On peut tout d'abord noter que la culture en France, surtout à Paris et celle des grandes villes japonaises présentent une grande similitude au niveau de la vie quotidienne. La mondialisation des industries contribue sans doute largement à ce phénomène. La télévision joue un rôle dominant dans la culture populaire de nos deux pays.

Remarquons ensuite que les genre de programmes de la télévision sont semblables : films, drames, débats, jeux, reportages etc. Leurs contenus, pourtant, diffèrent. D'une part, nous constatons, dans les diffusions en France, plus d'ouverture, plus d'attention aux problèmes des droits humains, plus de liberté dans les notions de sentiments, comme par exemple la tolérance vis-à-vis de l'homosexualité. D'autre part, nous trouvons des preuves contestant les idées reçues à propos des Français, tel que leur individualisme.

En dernier lieu, on relèvera que le décalage des niveaux entre les programmes télévisés et la littérature reste évident : cette dernière nous fait penser et douter de la réalité plus que les premiers.

Un vaste champ des études comparatives reste à exploiter pour éclairer notre inconscient en matière de niveau social, ce que l'étude littéraire ne manque pas de révéler au niveau individuel.